

## 護郷隊

護郷隊員として

今帰仁村越地 護郷隊員 宮里 邦夫（十七歳）

昭和十九年の十二月に、謝花小学校にあった護郷隊の教育隊に入りました。崎山から全部歩いていきました。教育隊ではちゃんと軍服も靴も帽子もありました。ちょうど一か月間教育うけてですね、ずっと訓練して、もう非常にきびしかったです。この期間の食事は御飯に、豆腐とかいろんなもの少しずつ食べて、とてもお腹すきました。訓練終わったら軍服なんか、また、みんな返して帰りました。そして二月一日に羽地集合ですね。また私服着て、どういふうに通っていったかーとかく越地の自分のうちから歩いて集合しました。そのころトラックというのはありませんでしたから。本部は山の頂上です。当日は自分の洋服も少し持っていて、むこうで軍服や毛布といっさい、渡ったんです。

兵舎はカヤで全部作ってですね、そこに新入隊者の服なんかもあるてあつた。十七歳というはまだ子供ですから軍服もダブダブで靴も大きくてですね。自分は体も大きかったからいいんですよ。年下の方は小さかったんで非常にかわいそうでありました。きかんとすぐ、やられますからね（なぐるまね）。やはり古い兵隊はすごくたいたたり、軍ってこわかったですね。

タニウ岳では普江隊に入隊してですね。そっちは全部騒掘りです。兵舎はカヤで全部作ってですね、そこに新入隊者の服なんかもあるてあつた。十七歳というはまだ子供ですから軍服もダブダブで靴も大きくてですね。自分は体も大きかったからいいんですよ。年下の方は小さかったんで非常にかわいそうでありました。きかんとすぐ、やられますからね（なぐるまね）。やはり古い兵隊はすごくたいたたり、軍ってこわかったですね。

トコの家で眠って、昼はしょっちゅう、浜のアダンの中にかくれてーそれが二十年の六月頃ですか。そして久志の大浦崎に避難。家族と別々でしたが、むこうで一緒になってですね。自分からは大きかったし、タニウ岳で色も白くなっているから、区長さんたちがアメリカの作業に出さないでといて、とうとう出なかつたんです。そしてみんなと一緒に帰って来ました。

諸田善蔵さんは一緒でした。あの日は、はじめは一諸にいたんですが、こっちは危いと思ってわたしは、大城清栄さんと、もうこっちではお互いが出来ないから（一諸に隠れるのがむづかしいから）むこうにかくれようというって、二〇〇メートルぐらいはなれていました。別れて一時間ぐらいいしてからやられてるんです。それは久志にいく前でした。崎山の宇佐バンタの左側の墓の下の大きな岩の下にかくれていたんですよ。そのとき宜野湾の大山の方もそこでやられました。

久志での生活ははじめは全部テントを張って集団ですね。はじめはちゃんと米を配給して、はじめはおにぎりであつたんですが、飯場からもつてきてそれ食べていたんですが、そのあとは、分散して個人個人で、二小隊ずつで家をつくってですね。茅刈って来て、それで生活してました。

タニウ岳から食糧とりに帰ったときの道順は今でも覚えていますが、今の五八号線道路の北部工業高校入口がありますね。その上の山から、ずっとおりてきて、工業高校へいく橋があるんです。その川に一旦おりて、それからピーマタ通って伊豆味の方に廻って、乙羽に来て崎山に来たわけです。そのときは善蔵君も一緒でした。夜すよ。上陸しない前はしょっちゅうです。謝花では小銃の取り扱いやいろいろの訓練していますので、山ではただ騒掘りですね。前の厚生局長山川先生は、ぼくらの小隊長だったんです。それから保健所の瀬良垣さん、今は名護病院の事務長をされていますが、あの方は分隊長でありました。自分らの部落から三名いって、二名は戦死しています。米軍が上陸してから、又、タニウ岳の下の稲嶺という部落がありますがそこで激戦してですね。ぼくも間違いないと思つたんですが、ようやく生き残ったんですが。

上陸してからは食糧は乾麺包です。一日一袋なくて、ひもじくてですね。それからどどんと上陸して来て、食糧がないわけです。そのために自分らは普江隊から本部に廻されたわけです。それでも食糧ないもんですから、一応家に帰って食糧とって来なさいという命令を受けて、すぐ夜十名ぐらい隊を組んで、アメリカがいるところをずっとかくれかくれして夜村へ渡って来たんです。部落へ来ますと喜んで供出ですね。一応持って兼次の山から伊豆味にしようとして、敵に発見されて発砲されて全然いけないわけですよ。

しかし、いつももう完勝の日は近い、勝つ日は近い、するもんですから、その教育、受けておきますので、何とかして隊へ帰ろうとしたんですが、それでもアメリカがしょっちゅう発砲するわけです。それから、そのまま引き返したわけです。それでそのまま自分らはシマに残ったわけです。もういきませんでした。しかしシマにはアメリカが多いもんですから崎山部落に避難してました。自分のイトコがおりましたから。昼は草の中にかくれて、晩はイ

で道もみえないところですが、ちょうど雨降り、稲光りがします。すると兵隊たちは車と思つたりして逃げたりしてですね。自分らが帰ったのは本部だったから最後のほうでした。別の隊はもう自然に解散の意味で自分らよりずっと先に帰りよつたんです。二十年の五月のおわりか六月のはじめにかけて、タニウ岳で相当やられて、壕の中で、衛生兵が治療やつておりましたが、非常にわめきよつたんです。痛むといつてですね。自分はケガはありませんでした。擲弾筒持たされていましたが、あまり使わなかつたですね。

久志から帰って来てからは普通の生活をしたわけです。その場合隊からの連絡は何もなかつたです。

### 少年と兵隊の間

今帰仁村崎山 護郷隊員 金城 林 昌（十七歳）

今帰仁小学校に日本の軍がいた。そこで最初に医者健康診断を受けて、それから通知来て、教育にいったわけです。青年学校からです。

青年学校は十八歳、十九歳のかたが、ほとんどです。十九歳になると一応現役の召集がありましたからね。十八歳の人が多いですね。いったん護郷隊にはいったけど、とちゅうで現役の年に来て、またすぐ現役に入った人もあります。だから護郷隊にいた連中も自分らより一つ年上なのは全部現役にそのまま入隊したわけですよ。

検査のとき、からだが悪くて、肋膜炎か、医者にお願ひして、検査通らなかつたといつてよろこんで残つた連中も、あとで防衛隊に召集されてひどい目にあつたのもいました。ずっと中・南部にいて、地形もわからんで、そのまま帰らないのが多いですよ。あのころは片っ端から令状がきたもんですよ。武器も護郷隊の場合は普通は小銃だが、防衛隊の場合は竹槍とか手りゅう弾とかですしね。

自分らは謝花校で一か月間、教育うけて。自分は軽機(軽機関銃)班、からだも小さいので、軽機もって訓練するにも、重くて、ひじをすりむいたり、シャツもつけられないくらいでした。長い袖の軍服はないもんですから衤衤(ハカマ)のときなんか。ズボンも正式の軍服ですが、上は半袖です。

謝花では小学校の板の間に、ごきなんか敷いて寝たわけです。校舎はそのころ全部木造で床は板張りです。ごきして、毛布は一人に三枚ぐらいたつた。食事は腹一パイはなかつたです。それでもタニウよりはよかつた。タニウは玄米だけ。

教育期間中は外出なし。昼は訓練だけ。昼は疲れて、夜はグッスリ。それに軍人勲諭を覚えなければ、週番下士官が全然寝かさんものですから。もう覚えるまでは。訓練はきびしかつた。ほんとうにゲリラ戦の訓練だけですね。分隊長の悪い人は、備瀬の浜で、廻れ右をしないで、胸までつかるまで海に向つて歩かせる分隊長もいたですよ。教育期間中は宮城義雄という人が一番悪かつたです。その後みたこともないですよ。山川文雄さんや瀬良垣さんなんかみますがね。もうあれは、戦闘配備ついたら鉄砲でやつてやろうとまで、みんなで話しあつていましたがね。また、戦闘配備つてから

教育期間中に一回は、謝花から伊豆味を通つてタニウ岳へ食糧運搬したこともある。家まで友だちと二人で馬車借りにきて、謝花まで馬車もつていって。タニウのとき家の馬車で嘉手納の食糧運搬にいったときは、比謝橋の下流に港があつて舟艇が着いていた。十台位の馬車を運ねていきました。帰つてから、家まで馬車返しにくるとき、照明弾がボンボン打ちあげられていました。それから間もないころ米軍が上陸しました。

アメリカがあがつてきて、だんだん追ひこまれて、食糧がなくなつたし、ずっと東の源河の山まで、グループつくつてです。源河の山にハジウスイ、昔の輪をおおうという名前の部落があるんですよ。家は十軒ぐらゐるんですが、向うにいて、食べ物はなしいし山羊がいたもんだから、その山羊を売つてくれといつて、あるだけの金を集めて、みんなでもつていだけの集めて、山羊買つて、薬も買つてですね、薬もくれないですからね。この山で山羊焼いてですよ。ちょうど自分らがやつていのを運天港から引き揚げて来た特攻隊の方だったんですが、あれも一緒にしてくれといふもんだから、一緒に喜んで食べたんだが、一緒に行動してもいいですよといつたら喜んでですね、今帰仁にくるまで一緒だったんです。

源河ではタニウから帰つて来たのがその当時の協力隊として、名護の三中の生徒が協力に来て、食糧がないもんだから、同じ村の同じ部落でもあるし、もう自分らは帰るが、あんたがたはどうするかといつたらですね、自分らも一緒に是非連れていきなさいといふもんだから、そのとき下りて来たのが七、八名くらいですね。旧の二十二、三日に帰つてきた。渡辺大尉が地図を持って来たものですか

はおとなしくなつてよ。十七、八歳の子どもでしたが、宮城義雄、あんな人が世の中にいるかと思うぐらゐでした。

教育隊は軍隊と同じでした。護郷隊は名護にもいました。あつちこつち分けて教育受けたわけ。この辺は本部、今帰仁と一諸に謝花小学校、羽地あたりは名護、三中は鉄血勲皇隊といつた。米軍が上陸してからは宇土部隊の配下に、護郷隊も生徒も入れまじつて、各小隊毎に配置です。分隊に護郷隊何名、生徒何名といつて。

タニウ岳にいつてからは、自分らの場合は軽機だつたもんですからね。ごはんだけは多目だつたですね。おにぎりとか、量は多かつたです。最初のうちは玄米を木のウスでついで、ヌカをとつていました。戦闘配備についてからは玄米だけ。まづかつたです。味噌、しょう油はあつたが。

タニウ岳入隊当時は、食糧はこつちから馬車借りて、嘉手納から運搬したことがあります。隊には車もないし、タニウ岳から部落へ帰つてきて、馬と馬車お願いしてもつていって、そんなにして各小隊で集めて、嘉手納までいって、夜どおし歩いて、それから羽地小学校までもつて来て、そこからまた夜のうちに山までかついであげるんですよ。

馬とか馬車は隊員に、おうちにいて、借りられる可能性のあるものは借りてこいといつて。またみんな帰りたいものだから、借りて帰つて、そのたびに食糧なんかもつていって。タニウ岳の場合食糧はよく蓄えてあつたのですよ。あとで本部半島の軍隊が全部寄り集つたので不足したんですよ。軽機は九九式のものでした。教育隊のときは十一年式で重かつた。

らね。あの山の中から地図みて、稜線をおりて来たんです。

特攻隊の人たちは渡辺という大尉だつたんですがね、こつちおりに、もう一べん、ひとわたり運天港の自分の基地を見たいからというところもあつて、今帰仁まで一緒です。別れたのは湧川の最初の部落です。我部井ですか。一応着いてですね。一晚寝て、向うで解散したんですが。自分らと一緒に来たのは渡辺隊長一人だつたと思ひます。そのとき、あれらの日本刀も自分らが持つたりして、山羊の生肉をあまり食べすぎたもんだから、下痢したもんだから。渡辺大尉はそのあとで渡喜仁の謝花喜慶さんなんかを斬り殺しています。みんなと別れてから、諸志の康二さん、あれは一番豪傑ですね、意地があつたですよ。帰つて来てから、米軍の駐屯している兼次校あたり全部斬り込みしてよ。そのために、自分らこつちにいってもアメリカ軍が全部荒らしてですよ。搜索されて。

村上隊、護郷隊は、その後、今日からは解散ということはなかつた。自然に食糧が切れたものだから。それでもまだ負けていないという気持ちはあつたんですがね、お家来でも。だから、羽地の呉我の上までは、相当食糧を運搬したんです。私服に着替えて、食糧集めて分隊長のところにいきました。分隊長は呉我の玉城秀一という方です。あのかたは呉我の山まで来ていたもんですから、食糧はこつちから相当運搬したんだが、もうだめだと思つて持つていかなくなつた。いつからか、日は覚えていませんが。

それからは毎日、弁当持ちで、海岸の方に朝から日が暮れるまでいました。アダンの中にかくれて暮してですよ。そんなときに、宮城康二さんなんかの斬り込みがあつて、米軍の搜索がきびしくなつ

て。

上里善藏さんがやられたのもその頃です。上里さんは、戦前上里、戦後すぐ諸田、今また上里になっています。彼は一人っ子でした。

自分ら日が暮れるまで、一緒にかくれておったんですがね。少し離れていたの助かったんです。家に帰るまで気がつかなかった。日が暮れて帰ってから、気がついてそれからさがしに夜歩いたんですがね。帰っていない人をさがすといつて。上里さんは海岸のアダンの山の中で、うしろからやられて、三十メートルぐらいのガケから、まっすぐ落ちたんですよ。もう一人は宜野灣のかただったですがね。腿を貫通してつかまえられたわけです。アメリカ軍の病院にかつき込んで、退院してから、避難先の久志でみました。今元気ですがね。じっとしていたのは助かって、逃げたのはやられたわけ。崎山の売店している平良幸二郎という人は元気で帰って来ています。その日は旧の五月十四日、月夜でした。上里善藏さんは気の毒なことでした。タニウから折角生き残って帰ったのに！。

### 三 中 兵

今帰仁村字崎山 三中生徒 池 原 善 治 (十六歳)

三中の場合は、春休み中でしたが、三月二十二日の朝十時頃、召集の通知が来たんです。すぐ家を出て、名護まで歩いて、ついたのは昼あとだったと思います。それで夕方六時ごろみんな集められて

村に帰ってからはずっと家にいたんです。うちらはまだ二年生だから、三年になるかならないかですね。帰ってからはどうもなかった。久志の収容所へはみんなと一緒にいった。

タニウは、負けて逃げてからでも、相当食糧はあった。あとで取りにいった人もある。ボクラ、久志に収容されてから友達といったことがあるが、相当あった。

あの頃、中学生はみんな軍隊にとられることになっていたのでよ。いわゆる中学三年のはじまりでしょう。三年、四年、五年の人は銃の訓練やるでしょう。生徒は着剣したら自分のせいより銃の方が高いのめいたが、身体検査は、徴兵検査と同じように精密にやっています。

### 護 郷 隊 員

今帰仁村字兼次 護郷隊員 諸喜田 林光 (二六歳)

自分はそれまでは、軍属で読谷飛行場にいました。そこで通信関係の仕事、飛行機の発着でしたが短波の傍受もやっていました。インドとかサンフランシスコとかの放送聞いてもう沖縄もだめだなと感じていたんですが。

ちょうど休みでシマに帰ったら、村の兵事係をしていた玉城鎮夫さんが、護郷隊の分隊長がいらないから来るようにと来ていました。もう制空権もとられて、どうせ飛行機も望まないし、まあ護郷隊といたら、郷土を守るということだし、羽地の山なら家も近いから

二つに分けられて、一方は八重岳の宇土部隊、一方はタニウ岳にある村上隊ということになりました。すぐ、六時から配属されました。護郷隊の歌は、その当時三中の生徒もよく歌っていました。護郷隊が列を組んで、隊歌をうたって通るのをよくみました。その隊は郷土を守る隊ということしか教えられていませんでした。

最初は真部山におったんです。真部山で百名ですね、全部一緒にあって、むこうで、追われて、三中生もほとんどタニウ岳まで。運天におった白石部隊と、こちらは一緒にたつて逃げたのは。白石部隊は運天にいたのが八重岳に来ていました。米軍が四月の六日に上陸しましたね。今帰仁に上陸というときに、はや八重岳に来ていました。真部山では二十二名なくなっています。四月の十六日です。最後、寄り集まったのはタニウですよ。

その時分までタニウに食糧は相当あったんです。真部山から嘉津宇のふもと通って、名護の今の火北区ですね。柳原通って火北区通って、そこにダムがありますね、そのダムのそばから名護岳つぎって、それからタニウに入っていたんです。農林生徒もほとんど最後にはタニウに来ておった。タニウから大浦崎ですね。今のキヤンプハンセン、二見通って、あれから久志岳に登ったんです。

戦闘はハンチヂというところ、四月の上陸の翌日です。配属将校が陣頭指揮で足を痛めて、この人は広島の人でした。自分の中隊長もタニウでやられています。

わたしらは久志岳でおわって解散したもんだから、生徒はそのまま帰ったんですよ。源河山のふもとで、一応源河の人と一緒にあったもんですから、また、自分らの先輩がおつてです。

と、入隊することになりました。護郷隊に入るために読谷はやめたのです。

護郷隊に来てから、通信がとだえて、通信機の電池がなくなつて、共同通信の傍受も出来なくなつて、それから機材をとり首里までいって来たんです。タニウ岳ではルーズベルトの死亡、沖縄への激励のことは、南大将のあれなんか傍受したあとです。

タニウ岳から久志に出て、久志の浜からサバニで平安座の間を通って浜比嘉で泊って、それから島尻の知念岬まで漕いでです。首里は包囲されて、南部へ撤退する直前です。

行きはサバニを三ソウ出して、着いたのは自分たちだけ、また帰りには二ソウ出してやはり自分だけでした。

行きがけに、浜比嘉では人情厚くて、昼にアメリカカーが舟艇で上陸して来よったんですが、部落の婦人会からかくまってもらって、御飯も食べさせてもらいました。結局二泊して夜出ました。自分いれて七名。中城湾はアメリカの軍艦やら輸送船団で一パイでしょう。これはもう生きて帰れないと思いました。

浜比嘉からサバニでまっすぐつぎって、夜ちようどいく途中、やがて津堅との間で潜水艦にみつけれられて、照明弾パンナイあげられて。自分は泳げないが、あとはみんな海ンチュ連れていったんですがね。自分は軍服脱がないが、あれたちは変装させていた。みんな本部の青年たちでした。

船団の沖側を大まわりして漕いで、ようやく無事知念岬ついて、着く直前にも、津堅と久高の間になりますかね、照明弾あげられたので、四発目の照明弾が消えると同時に、すぐリーフからあがって

ですよ。やがて海の中でやられよかったです。

知念岬ついてからは、友軍は全くかくれているんですから、敵か味方かわからんで。そこからちょっと上に部隊があって、海軍関係だったんですが、中城湾の船団を撃沈する任務だったんです。それで、漕いでくるときに状況みていたので自分らが船の配置なんか書いたりして、是非船船団にいつてくれとあって、むこうの少尉だったが―隊長は大尉だったんですがね―あの人が船船団に連れていつて、団長は大木という中佐だったんですがね、あの人はよくがんばったといつて、お酒飲みなさいとくれていますよ、煙草も全然なくて困っているときに、両手一パイずつ分けて、雑ノウにお土産にもらいましたかね。

船船団のすぐ隣りは軍司令部だったから、タニウの現況報告なんかやって、帰りは命令、布告―敵に一滴の水も与えるなとか―自分らは資材の受領にいつたんだが、何もなくて、連絡だけになりました。それで連絡はいつて、牛島中将にもいつて報告して、牛島中将なんか、あれから南下されたんですよ。

帰日も、知念からまた同じように帰ったんです。そのときは岡軍曹といつて、この人も首里まで来て帰れなくなつていたんですが、軍司令部から一緒になつて、自分たち帰るといつたら一緒に帰るといつて―あれたちはやられました。出るときは二ソウ、途中でアメリカの掃海艇か何かに撃たれてやられたんですがね。

久志に漕いで戻つて、久志からタニウ岳に帰りました。

浜比嘉ではあのとき欲待されたので、後に二、三回いつたことがあります、あの当時の区長は、自分らがあがつた晩、アメリカ

でおられた人もおつたんです。あとからCICからいろいろ聞かれたんですよ。兵隊と知つてなんともなかった。あとから、じゃ君たち兵隊おろしなさいといつて、あれから雑語もいつたりした。あの当時、捕虜になるのはこわかった。久志でみつかつてからは、山の中の人たちを誘つて、おろす役目をしました。久志から帰るときは、村のみんなと一緒にした。二十六歳でした。

戦争の悲惨というのはい。またと戦争なんか―。自分がタニウ岳から隊員たち連れて帰つてから、三人に手榴弾わたしてあつたんですが、それで二名なくなつていて。一人は家に帰つて、かくれていつアメリカに。一人はジープ攻撃に手榴弾が点火しなかつたんでしようね。途中でやられて。家でなくなつたのは崎山の諸田善蔵さん、ウサバンタのところ。あれがうちの部隊でした。二人とも死んで、自分も一時は苦しんだ。

終戦なつて、久志から帰つてきてじき、タキンチジでは、たくさんの戦死者の骨を埋めたんです。足の骨が出ていたりして、ちょっと見苦しいからといつて。兼次の青年と一緒に。埋葬されていたのが何かに掘り返されていたのです。

## 護郷隊員

今帰仁村字諸志 宮城 康 二(十七歳)

謝花小学校で教育受けたのは一か月か五十日か、よく覚えていま

に密告されてカンパンにぶちこまれたということです。あとからいつて、おわびしたんですが、申訳なくて困つたんです。

タニウ岳では食糧がなくなつて、羽地の出身者なんか近い人はうちからもつて来たりしましたが、自分らは今帰仁、本部方面の八十名連れて来たんですがね。今帰仁の隊員なんかまだ十九歳ぐらいしかならんですから、正式な兵隊でもないし、もう家に帰つたら、親がやらんわけですよ。それでも、最後には二人になつて、突破してタニウ岳へいくつもりでしたが、途中で熱発して、帰つて来てからはもう本隊もわからず、隊員の家にもいけずに、責任上もう隊長に―。今帰仁から連絡も出来ないし。隊員には三回位集まるように連絡するんですが集まらないで、玉城清光と二人になつたんですよ。背囊に鯉節なんか一パイつめて、平敷の山を通つていつたが―。キシルといつて名護のダムがあるが、アメリカの機銃陣地がありました、こつちまで二回来たんですよ。この道を遮断されて機銃掃射でやられてみんな逃げて、撃破できなくて、清光と二人だけになつて、背囊は伊豆味の山にかくして、それからアীগトという山にいつたこともあり。兼次の学校にアメリカがいつて、むこうからまる見えでしたかね。この山で休んで木に登つたりしたから発見されて、砲撃されてひどい目にあつた。

久志の収容所に収容されたときは、もう家にいました。それでみんなと一緒にいきました。あのとき、山にいつたんですが、兵隊であることを見つげられてですよ。ショウズイさんと二人です。二人とも山に連れていかれて。そして何とか少尉と山にいたんですよ。あの日本軍も一緒に山おりましたほうがいいよとすすめたんですが、せん。そこで護郷隊の訓練を受けたのです。キピンかったです。もう軍隊の新兵と全く同じでした。

それから家に帰つて、しばらくして召集令状みたいな赤い紙がきて。その日わたしは畑仕事で、カズラを植えて帰つてきたら、召集令状きてるといつて、うちの親父は男になつたんだからと喜んで送られたんだが。入隊のときの着るものもないものだから、オジサンの上衣借りてズボン自分のもので、それにスコップとクワをもつて役所に集合しました。役所からはすぐタニウ岳へいきました。謝花で教育受けたときの人たちが分隊長とか小隊長とかになつていたので少し安心でした。むこうへいつてから小銃がわたりました。

入隊してからは第二中隊で、中隊長は菅江少尉―この方は米軍が上陸してすこして戦死しました。上陸してから四日ぐらいしてから―アメリカは夜になつたら戦闘しなかつたんですが、それで夕方になつて下りていつたら、むこうの合言葉にかかつて、すぐパツとやられて―。小隊長は宮城義雄という方でした。それから、ここではできないからといつてタニウ岳へいつてから、うちらは全部、糧秣もつていつたら、タニウ岳にはもう護郷隊の陣地というより食糧おいてあるんだが、宇土部隊、警備隊から全部引き揚げてきて、糧秣全部食べられたもんだから、護郷隊は食糧がないから、各自の村に帰るように、解散といつたから、それから源河山にいつてから、渡辺大尉といつたのとあつて、それから渡辺大尉と行動するようになったのです。

最初の頃は山にかくれて、三人組といつて弾薬もつて、夜になると私物(私服のこと)筆着)着てタオルに十キロ爆雷包んでいつて

家や橋や、米軍の近くに仕掛けてくるんです。その頃、呉我橋も破壊されました。あれは玉城秀一という分隊長が部下連れて、その中に友達の荻堂盛福もおりましたから、五〇〇キロの不発弾の爆薬を使ったといっていました。戦闘といったら、三人組で各小隊から三名、ススキが人より高いでしょう、その中にふせていくのを、むこうからパンパン撃ってくる。目をあけようがないですよ。土がはねてきて。はじめ艦砲で撃ってから、ビービー飛行機が一回旋回したらすぐ艦砲、正確で十メートルとはなれない。それで土をかぶるのはどうもないが、破片がこわかった。何ともいいようなない気味の悪い音。三中兵といって、三中の生徒もいました。菅江隊にも入れて、兵隊なんかやられて、その中には上陸したときやられたのがある。与那嶺ヒロシといって三中の五年生で体も大きかったが、小銃はなかったので、竹槍の先に十五センチか二十センチ位の刃をつけて。

タニウ岳にいて戦闘したのは真喜屋攻撃ぐらいのものでした。あのとき越地の大城幸義が昼間戦死しています。タニウ岳では、五食ぐらい食べなかったこともあり。乾麺かんめん包ぱく二日一袋とか、にぎりめし一日に二つとか、腹がへってたまりませんでした。だから山の中を移動するとき、弾丸が飛んできても、野イチゴがあったら両手で頬張りました。ヘタなんかとるヒマもない。一週間か二週間、そんな状態でしたが、真喜屋攻撃の前日は飯盆いひんいっばいのジュニー、腹いっぱい食べきれなかった。戦闘のときこんなに食べれるんなら毎日戦闘でもいいと思いました。その翌日が真喜屋攻撃、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

のあと、長くしないでアメリカがやってきました。真喜屋攻撃の前に、中隊長の前に坐らされて、お前も戦闘にいくからといって、御飯も飯盆に一パイずつ、三名にくれて、あの時まで中隊長は元気だった。真喜屋攻撃の四、五日あとか、二、三日あとか、とにかくあれが終ってからタニウ岳にいった。タニウ岳のぼって一回しか戦闘しないから。あれの前には一回は攻撃された。宮城義雄小隊長は軍刀抜いて前へ前へと号令ばかりかけるが自分ほうしにしかいないから誰も進む人がなくて、宮城兵長が軽機をうばってバラバラとしてやったら全部前へ進むようになった。全部前へ進むとアメリカはずつと退がっていくわけ。退ったかと思うとすぐ、山砲、迫撃砲がサーライナイで。

その戦闘で、むこうから来ているのがわからなくて、うちらその下のガケのくぼちにかくれていたたり、その虚、自分らの真上で軽機すえてむこう撃ちよった。来たら手榴弾でやるつもりでいた。

それでも、戦闘らしい戦闘は真喜屋攻撃ぐらいのもので、あとは個人的に三人組でいって、爆薬もっていって爆破したのが一回ぐらい。あれは真喜屋攻撃の前晩、民間の家も焼きなさいと命令で焼いた。爆薬は直径十センチぐらいの円筒型、護郷隊にいて戦闘といって大してなかった。むしろずうとあとで海軍と一緒にやってからのほうが大きかった。全体としてはアメリカに追われることのほうが多かった。

タニウ岳で解散してから、みんなで国頭へいこうと今婦仁村出身の友達八名と源河山へいった中村喜久(運天)、小那胡安敬(渡喜仁)、荻堂盛福(呉我山)、上間政信(平敷)、仲里茂直(平敷)、

た。そばで近所のオッサンがいて、その人は支那事変に四、五年いたことだったが、民家のものをとったといって怒っていた。こちらは軍服着ているので人を何とも思わなかった。なぜ死ぬのか、何時死ぬのか判らない状態だったから人を恐いとは思わなかったんだが、そのオッサンにさんざん怒られて、標準語でいっているから悪うございましたと頭ペコペコやってるんだが。そしたらむこうで渡辺大尉が聞いているわけ。それでそのオッサンに、何か、お前叩き殺すといって軍刀に手をかけている。山羊の主がペコペコ何回も頭をさげて、刀を抜こうとするとところをつかまえて。自分らは何とも思わない。散々に怒られているから、自分らが悪いことしているのに。殺すといっても何とも思わなかった。とうとう斬ることはやめて、帰ってきて、また人の諸掘ろうとしたら、おばあさんに怒られて、八十過ぎるおばあさん。そのままやめて、とうとう、ここではできないから今婦仁に渡ろうといっ、あれから渡ってきたです。源河山におるときは松仁おじさんなんかみえました。あの人は防衛隊にとられていた。

今婦仁に引き揚げるときは、自分らは後に亡くなった小那胡安敬と二人で斥候みたいにいて、五百メートルぐらい先になって部落の状況みて、大丈夫だったら呼んで連れてきて、そうして仲尾次の部落を突破して、それから仲尾の部落は隠れるところがないから五十メートルぐらいはなれて。呉我の場合はみんな仲尾の隅っこに待って、自分らはずつと呉我橋のところまでいってきて何でもないよとまた呼びきてあれでまた、今のスバルマリーナのところから山に入った。少しでも大きい道、車の通る道はよけようとした。ど

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

と、それまでは仲尾次山に中隊があったもんだから。真喜屋攻撃

こで米軍に会うかもわからないから。自分はもう小那覇安敬と二人で、もうこんな難儀するより、二人で出ようか(逃げようか)といったこともあるですよ。呉我まで行って交替しようといつても誰も交替しようという人がいない。彼らは待っていてソテツのところ隠れたりして何もでないようにして、本当にアホらしいからあれからほっておいて二人だけ逃げようかといって。自分らの隊長ならだけど、何も知らない、喜久だけが知っているだけで海軍であろうが陸軍であろうが、他人だからといって。

山に入って嵐山か呉我山のあたりまできて、もう今帰仁に帰ったので、また明日会おうといって別れた。それで自分は二、三日いかなかったら中村喜久が呼びに来た。

うちの場合は姉が四名もいるから、毎日のようにアメリカの憲兵がきていた。一番上の姉(のちに亡くなった)は英語が少し判ったし、親戚にスペインから帰ったオバサンがいた。それに憲兵がスペイン人だということで、よけいに親しくなって、だから、自分が帰ったら大変であるわけ。山に隠れてばかりいるから色も白いでしよう。それで、うちにおるなど。ユ一は軍隊にいったんだからどこで死んでも、ユ一は名譽の戦死である。うちに帰ったら、うちが大変だから。ユ一は山にいきなさいと、おやじにも追っぱられて、あれからももう全然うちにこなかったですよ。シマの隣の兄さんとはとても親しかったので、夜はあっちの家で御飯たべて、すぐに山に逃げようには絶対こなかった。あの方は護郷隊はのがれたが、あとで防衛隊にいつて亡くなりました。

もうめいめい逃げ勝負。自分は三堤で戦死したという海軍の中島中尉の軍刀あずかっていたのでそれと飯盒もって逃げて。軍刀は長いものでそのある立派なものだったが、あとで壕の中に食糧と一緒にかくしておいたのを、一週間も壕にいかなかったら、食糧も日本刀も全部荒らされて、あの日本刀は値打ものだったろう。とても立派なものだった。多分移動する日本兵もっていったんだろう。

海軍部隊は自分がいなければ困るわけ。糧秣運んでいくし、言葉も年寄りとは通じないでしょう。それで煙草でキゲンとったりなんかして、自分は何のためにいたか判らなかつたが。

このころのある晩一といっても夜明けがた、海軍の山田兵曹(上等下士官だったと思う)が部下四、五名つれて、軍服に血いっばいつけて帰ったことがあります。返り血というんですか。渡喜仁の警防団長を斬った話をしていました。引っぱり出すところから斬り方まで、動作をつけて説明していました。小那覇安敬の親戚(オジサン)になっている人だから、キミはこんなことすると大変だから、帰らなさいといつて帰したんだが、渡辺大尉はワンマンで、自分ではやらないが、今帰仁のえらい方を三名殺させているのです。

自分が二、三日いなかつたといつて、ひどく怒られたことがあつた。うちに帰ったら戦闘やる気持がなくなつたのかといつて、自分ら同じ分隊でも何でもないから、そんな海軍のいうことなんか聞かなくてもいいという気持でいたし、ほかの青年たちはいかないのに、自分はいつたら怒られて、シャクにさわつていた。本当いえば自分がこの連中つれて来てやつたのに、上官や部下たちに紹介する

中村喜久が呼びに来たのでまた山へいったのです。渡辺大尉とは伊豆味の、嘉津宇岳のすぐ下の部落で出会いました。友軍の飛行機が山にぶつつけて不時着したのをみにいきました。民間人もたくさんみに来ていた。

渡辺大尉たちがいる部落には連天の海軍部隊の兵隊たちがいました。連天からは、トキねえさんとカズねえさんとマサ子という人と三人ついて来ていて、あの方たちがいたから自分もながくいることができたんです。あの姉さんたちは、兵隊たちとは連天からずっと知り合いで友だちみたいになっていて、民間であれされるよりは友達と一緒に殺されてもいいというぐらいい。年も若いし気持があの当時の女子青年だから、自分よりか年上ではあるが、自分を子供か弟のように着物のつくろいをしてくれたり、兵隊と起居を共にしていたが、自分は兵隊と姉さんの中にはさまれて寝るというぐらいいで、自分がいなければ、ねえさんたちも絶対あれらと一緒におれないと、御飯もトキねえさんたちが炊いてくれるという生活が続きました。それでも五月まではいなかつたと思います。

ある日この部落の人がアメリカに連絡したのです。自分らが運天いつて糧秣持つてきて、一人の人は百斤ぐらいいの豚もつてきて、昼食には脂や骨のところで我慢して、夕食はスキ焼しようと思つてにしていた。その日に米軍がパンパンやつて来たのです。部落の上から、このとき隊長はいたかな。何とか兵曹長(安長兵曹長?)が拳銃もつて、米軍みるといつて立ち上つたところを横から撃たれて死にました。みんなは米軍二、三名だからこつち来たら迎え撃つつもりで両方に分かれて小銃構えて待つていたが、やられたといつてのにはオレが連れてきたとか一緒に行動しているとか、子分みたいに。面白くないから、もう飯盒一つあればどこでも食えるんだからといつて日本刀一つもつて逃げようとするときに、また同じ兵隊に会つたわけ。どこにいুকかと一逃げるというわけにもいかんしどうせ逃げて一緒だし、会つたからまた仕方なく一緒にいて、これからア一グに一月いきました。

ア一グでは五名ずつわかれて、全部で二十名ぐらいいだつたか、そこには精喜校長(玉城)、ひろし(玉城)先生、上間政春先生、光正(吉田)先生なんか四、五名一緒に別の小屋にいました。ア一グといつのはタキンチデの下の方。二か月ぐらいいそこにいて少しは戦争なんかしました。攻撃で軽機ももつていたが薬莢がかかつて出ないで引き揚げたんだが、でも大体は、朝の星(暁の明星のこと)が出るころ朝御飯たべて、にぎり飯でも藪でも炊いて、すぐ山にのぼつて十二時頃までグッスリ寝て、日が暮れる頃また人家の方にくるといふのが日課でした。昼頃からパンパンしてアメリカが上つてくるから、それまで山にかくれていて、六時頃、くらくらなつたらあれらおりにいくから。帰つて来たらまた御飯の準備、各分隊毎にやつて、女も三人の人は炊事をやつて、自分ら諸なんかとつてきて、一度は夜にアメリカ来ないからと堂々とやつたりした。また一度はウフドウの部落では、家に入つたらコラツといわれ、コンパンワといつたらすぐ逃げるわけ。コラツといつたのは村の青年連中がドロボーの見張りであつたわけ。連中が逃げるので、誰か、逃げるのは撃ち殺すぞと標準語でいつたらすぐ引返したので、訳をきいたら、昼間あんまり荒らされるから夜は見張りしているといつて

でした。またほかの家の裏座敷をあけたら、五十位のおばさんが髪をといて押入の中に寝ていたのが、開けるとパツと起きて何もいわない、オシでもない。他の兵隊さんが標準語でいっても、自分がウチナーゲチでいっても一言もいわないで。

山にいる兵隊たちの糧秣は自分がいつも世話をした。こちらが、あれらの面倒みているようなもんだから。

邦夫や林昌らは源河から今帰仁に帰るまでは一緒だったが、呉我山で解散してからは何も行動していないはずです。行動したのは自分と呉我山の狹堂盛福の二人だけです。

あるとき、うちへ帰ったら誰もいない。満月の晩で山羊の鳴き声が聞えるだけ。あくる朝、山にのぼるとき大城哲夫さんの親戚の人に、みんな久志にいったというのを聞かされました。そのときは各部落の山の入口には全部アメリカのテント張っている。兵隊三名ぐらいつれて兼次バンタからおりてきたわけです。あそこにはアメリカーない計算で。そしてアメリカはタンクのところにはテント張っているわけ。ところが中にはいないで、土手のところに寝ていたのです。あの当時は各個攻撃とかいいうのがあることを知っているから、外にいたわけ。二人いるのがわかった。こっちははだしだがむこうは靴カパカパしている。ハローとかなんとかいつてすぐパンパン撃たれたわけ。ちゃんとねらったら当たったはずだが、接近して五メートルか十メートルぐらい、土手から引っくり返って撃つらしい。自分はすぐ走って逃げたんだが兵隊の一人もあがって来たが、あと一人はあがって来ないから、また引き返してみたら、むこうからホフク前進みたいにして来よった。恐しくて、これではもう

にアメリカ来やせんかねえといつて、何とか少尉というのは三番目に歩いているのだが、大きい道に出る前には必ず拳銃出しているんだが、そのくらいに上になっている人というのは戦闘になった時には駄目ですね。渡辺大尉という人なんか、もう戦闘あと百メートル、二百メートルというところになったら腹痛むといつて下士官に抱かれて、何もできない。仮小屋に休むといつて、戦闘やりなさいやりなさいと口ではいうんだが、いざ戦闘、二百メートルぐらいになったら急に腹痛くなって、うちらだけやらすわけ。それで自分はよけいアホらしくなったんだが、もう帰るところはないし、また日本のためだからと、死んでも仕方ない。親父に追っばらわれたんだからどこで死んでも、ためになればいいんだからという考えもあってやっただんです。

山にいて、山とシマと往復していたが玉砕（日本の敗戦のこと＝筆者）を聞いたのは八月の下旬だったと思う。それで玉砕もしたから、自分らここで全部死んでもいいし、シマの人がいる大浦崎へ帰ってから自分らもう捕虜されるから自殺するか、どっちかを選んでやれ、自分が今までやったことは何だからと、全部整列して、御苦労だったということで敬礼されて、日本刀もなくしたからといつて、海軍の短剣をユーにゆずるからといつて。これ持っていたのだが、自分がシマに帰ってくるときに、親父がアメリカと米の俵四俵と換えてきているわけ。今は記念にあつてもよかったと思うのだが、あの当時食糧が不自由だったし、自分がいないときにやっただから。あのときには親父は自分を何とも思わないで、自分がいてもやれと命令するぐらいだったから。

家にはいくなといつて、自分一人はどうしてもいかなばといつて、ガツコージの幸栄おじさんところの門から出られなくて、モリサンヤーといつて田んぼの口のところからうちに帰ったんです。帰ったら誰もいない。シーンとしている。大豆とかいろんなものもちやんとしまつてあるから、羽地や運天みたいなことはされないで、砂糖でも立派に保管してあるから、いつかは帰ってくるだろうと思つて、隣りに砂糖と大豆もつていって煮て、あの時は帰った。羽地や運天というのは、運天の人たちが引つ張られていった（羽地強制収容のこと）あとをみているからです。あのときは運天にいったら、庭にムシロ敷いてお茶やお茶菓子も出して、豆腐ひくといつて半分はひいてあるが半分はそのままパケツに、洗濯はタライに入っているが二、三枚は干してあるというありさま、そのまま引っぱられたことが判りよつたですね。生菓子なんかちよつと腐りかけていたが、ほかのものは何ともないぐらいのときだから、その次の日ぐらいいったか。

兼次のキャンプ攻撃にもいきました。あれやっただからといつて、そのあとうちの方はアメリカの警戒で大変だった。自分はボロの着物着て康子（内閣敏氏の長女）をおんぶして親泊までいった。親泊にはアメリカの病院や部隊があるといつて、様子みにいかされよつた。それで御飯は内閣で食べて、小さい子おんぶしてアメリカの前を堂々と様子みにいった。それで夜、爆薬持っていくわけ。これ攻撃したときは二晩寝ずに。伊豆味の方、暗くなってから出られないもんだから明るいうちにむこう出て、でまた晩に歩いて帰って、すぐまた自分が兵隊たちの先頭になって道案内にきて、暗い

シマへ帰ったときはみんなもう、大浦崎へいっているから、食糧もつていった。もう日本も玉砕しているから、大浦崎へいっても親父ももう喜んでくれた。食糧運んでいったんだが、年齢十六歳以上は訊問あるからといつて、区長さんが命令で行きなさい、すぐ逃げなさいといわれて、またすぐシマに糧秣とりに来て。やつとむこうへついて疲れているのに訊問があるといつて、すぐその晩に帰って来よつたですよ。自分がいなかったら家のものは食いの困るし、兵隊の年頃でもあるし、バレて留置場に入れられたら区長さんも困るといふので、そうしたのですよ。だからもうずつとシマ行ったり来たりして—自分がいるためにうちの人は食事は三回。二回はおカユ、昼間は一回イモ御飯で固くして食べるとかして、普通のうちよりはよかつたと思う。

大浦からみんな引き揚げてからはもう、何もなかった。